

〔研究ノート〕

「京畿遊歴図冊」（大和文華館蔵）について—画家の関心—

大和文華館の所蔵品に「京畿遊歴図冊」という風景図を集めた画帖があります。木々や岩は簡略に表され文字によるメモも多数書き込まれているので、完成された図を集めたわけではなく、各図はあくまでもスケッチとして描かれたと見られます。しかし、多くの頁には色が付けられており、爽やかな印象の彩色とともに風景図を鑑賞する楽しみも十分に味わうことができます(図1)。ここでは、「京畿遊歴図冊」を描いた画家がどのようなことに関心を持っていたのかという点について、書き込まれたメモや図の描き方から考えてみたいと思います。

その前にまず、各図の状態を簡単にみておくと、現在画帖に貼られている図の何枚かは、紙に折り目跡があり、折り目の横の小さな穴と虫喰いの跡が一致するので、折った状態で重ねて綴じられていた時期があったとわかります。中には折り目や穴の見えない紙もあり、当初から全ての図が一セットで扱われていたわけではないようですが、筆致や彩色の仕方、文字の筆跡は酷似しており、いずれの図も同一の人物が近い時期に描いたと考えてよいでしょう。ただし、描いた時期に関しては、山が青々としている夏頃から、木の葉が落ちて山が茶色っぽく見えるようになる季節までの幅があります。現段階でこれらの図を描いた画家は分かっていません。しかし、現実にはあり得ない高さから俯瞰する視点や不自然な空間構成といった要素はなく、画家が自身の見たままに風景をス

ケッチしようと試みた様子が窺えるので、実証的精神の高まりや西洋銅版画の学習をすでに経た江戸時代後期以降の制作と見られます。一方で、地名のメモには「ツノクニ(津国)」「ハリマ(播磨)」「淡州」や、「和勢ノ国サカヒ(和泉と伊勢の国さかい)」といった具合に旧国名がしばしば用いられているので、江戸時代の画家が描いたと考えて差し支えないでしょう。

「京畿遊歴図冊」中には、奈良県の吉野周辺を描いた図が多く見られ、越部、増口、六田など現在は吉野町の大字に当たる地名や、龍門の滝、苔清水、西行庵といった名所などが記録されています。他にも吉野周辺地域に限らず、琵琶湖越しに三上山を望む図(図2)や、和泉の名所として知られる高師浜の図も含まれていますが、三上山を望む図や高師浜の図には彩色が施されておらず、吉野周辺を描いた図ほどの熱心さは見られません。それに対して、吉野周辺を描いた図では彩色があるのに加え、吉野周辺の地理に関するメモまでもが多く書き残されています(図3)。まず、吉野川の河原付近から周囲を見渡したときに見える有名な山の名が逐一書き込まれています。また、図中の道はどこに続いているかといった案内的要素を含んだメモもあります。さらに、いくつかの図には、どういう場所からどの方向を向いて描いたのかというメモが記されています。これらの書き込みには、図を描いて廻っている吉野周辺地域を総合的に把握しようとする画

家の意識が表れているようです。また、吉野町喜佐谷の辺りを描いた図には「聞タカヘタルカ(聞き違えたるか)」と読めるメモがあるので、吉野地域に詳しい人物の案内を受けながら散策していた可能性があります。これらを合わせて考えると、「京畿遊歴図冊」は他の地域から吉野を目的地として訪れた画家による記録であり、画家は吉野を訪れる前後に近江や和泉を通過したと考えられるでしょう。

続いて描き方の特徴を見ていくと、山は濃淡まじえた緑色を用いて塗られ、図冊の後半では茶色がかった秋山の様子も彩色によって表されています。また、細部へのこだわりはさほど見られず、中景から遠景にかけての木々では樹形を気にすることなく一様に、樹幹は縦に引いた線で表され、枝葉は短い線を横向きに引いて表されています。細部にこだわらず風景の大略をつかむのはスケッチを描く際の一般的な特徴ですが、「京畿遊歴図冊」では、適度の省略が描き込みの多さによるわずらわしさを無くしてくれており、あっさりとした彩色とともに図の鑑賞効果を高めています。また、簡略化された中でも、絵具の濃淡や数色の塗り分けによって岩や山肌を表そうとする描き方が丁寧されており、彩色にはある程度の丁寧さが感じられます。書き込まれた文字には地名の他にも、「クリ(栗)」や「スギ(杉)」など山中の樹種を表したり、「スキカワヤネ(杉皮屋根)」と建物の部材を示したりするメモが見られます。これらは、後に

本式の絵画を制作するときのためのメモと考えられ、彩色の丁寧さにも本式の絵画制作に備える意図が表れているのではないのでしょうか。

「京畿遊歴図冊」は、吉野周辺地域を巡る旅の過程で制作された図を集めた画帖で、画家は吉野地域の地理の把握に第一の関心を置いているように見受けられます。単に美しい風景や名所の眺めを写すというだけではなく、山の位置や方角などに注意を払い地理的關係性の把握に努める意識は、谷文晁「公余探勝図」など“実景図”と呼ばれている作例に通じ、「京畿遊歴図冊」は実景図制作を行う際の第一段階の様相を探る上で重要な作例とも考えられます。もしもこの図冊を元にした本画が作られていたならば、これらのスケッチがどのように反映されていたのかという興味をそそられますが、現段階でそのような作品は見出せず、描法の類似した画家も見出せていません。この図冊に特徴的な要素を最後にもう一つだけ挙げておくと、「カケヒ(筧)」の構造を示した拡大図まで記録されている点があります(図4)。筧とは水を流すための樋を指しますが、川が近くない地域ではあまり見かけないものだったのででしょうか。これについては、画家の居住地や属性につながる要素だと考えられるため、画家の探索と合わせて今後調査していきたい部分です。(仁方越洪輝)



図1



図2



図3



図4